



2011・8

SORA 38号

水中り
柴田 佐知子

国難のたびに英雄青あらし

花ミモザ閉づることなき地獄門

紫陽花や人住みて家若がへる

故郷を夜ごと威して牛蛙

伽羅路や母の話に井戸のこと

次の田へもんどり打ちし濁り鮒

夕暮の青田にしるき風の道

何もなき道に雀や朝曇り

目覚めては一と日端居のごとき父

でで虫の一樹万の葉動かざる



鳩の巢や雨はやさしきまま上る
立葵園児の歌の揃ひけり
純潔の男老いたり燕子花
萍の下より夜の来りけり
山蟻の鋼のごとし座禅石
本尊へ素足の女近づけり
船虫や朝市はもうたたまれて
草笛の鳴らずじまひや海の紺
高くして日傘に男招きけり
箱庭の橋を渡つて逢ひにゆく
成りゆきに任せてをれば水中り
真夜中やこの世の端に水中花

夕立あと

高倉和子

袋角思ひつめたる色をして

田水張るたちまち山の立ち上がる

本を読むことも養生濃あぢさゐ

山壁に残る雨雲半夏生

張り切つて漕ぐ自転車やプールの日

夕立あと草の匂ひの戻りけり

植込みに鳥の羽ある暑さかな

日盛りの道を吐き出す父祖の山

大滝に打たれて体透きとほる

網戸より覗かれてゐるこの世かな



夏ひばり

中田みなみ

枕崎着きしその夜の初鰹

大漁旗下ろす骨まで日焼して

煙吐く島が夜空に西瓜割る

ごきぶりの隠る改築設計図

梅干を茶漬にのせて夏の雨

白南風や楽器を作る町歩き

試し音の楽器工房夏ひばり

ガラス器を選ぶ風鈴の音のなか

梅花藻を覗きし顔の重なれり

老いてゆく速さ雲とぶ夜の秋



被爆燈台

荒井千佐代

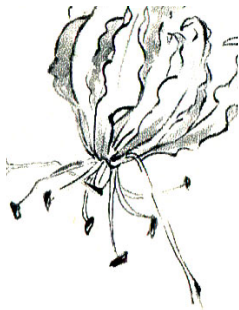
朝風の櫛聖鐘は撞かでおく
聖堂へ海南風に背を押され
迎へくれし信徒代表日焼けして
ユツカ咲かせて深閑と司祭館
梅雨兆す礼拝堂の列柱に
祝婚歌弾く梅雨冷えの鍵盤をもて
病葉の緋を巻き込んで鯉の渦
蛇殻の懈なほき一步を近づくる
海より戻れば箱庭も闇の中
朧太き被爆燈台早星



さざめいて

服部 早苗

万緑の水を亀の背わけゆけり
まいにちのいまが大切花南天
蜜豆や五分待つてといふメール
碁石のやうに庭のさつきの花盛り
気後れの色どり宿の貸浴衣
さざめいて網戸をすける越の海
花合歡や翡翠を磨く波の音
裸子の拾ふ丸石また丸石
波寄する際まで田植すみしかな
滴りの道の奥処の芭蕉堂



退庁時刻

柴田志津子

石屋根の青く暮れゆく芒種かな
秘めごとにも包まれてみむ落し文
結葉を婆娑と伐つたる目眩かな
川遊び浮輪をつけて飛び込めり
大袈裟な子の包帯や青すすき
郭公や墓を一つに落城址
下宿屋の枇杷が減りゆく低きより
遅れ来て息荒々と踊りの輪
七月や進学塾の大時計
壁泉の止まり退庁時刻です



鯉のぼり

山形

街路樹も駅のホームもさくらんぼ

米沢は植田へそそぐ雪解水

平鍬を使ふ夫婦やいもの花

田に道に庭に螢の舞ふといふ

瓜たべてをり瓜番の小学生

ゴンドラやリフトで登山蔵王岳

リフトの膝へ六月の熱射かな

六月や鳥海山の雪姿

山頂へ四籽登山ここらまで

甲羅干す亀まつすぐに泳ぐ蛇

鯉のぼり道を挟みて話しけり

だいじみどり



山国

松田明子

氷柱

大地真理

塊となりて稚鮎の流さるる

船虫の総身に耳あるごとし

鮎の子の水ごと目方量らるる

手の届く宿坊の梁梅雨湿り

一峰を背に別邸の作り滝

蛸壺を干して潮の香濃くなりぬ

軋みたる渡り廊下や梅雨寒し

氷柱の花の高さに爪立つ子

祀るもの多き山国粽結ふ

幼帝よ飛魚に乗り浮上されよ

一声のこだまとなりてほととぎす

はてさてと民話は続く夏炉端

母方の身近にありて桐の花

岩を食み岩に砕ける夏の川

幼名で呼び止められし祭の夜

夏の日や大壺なれば覗き込む

空作品評

柴田佐知子

祀るもの多き山国粽結ぶ

松田 明子

確かに町中に比すと山国は多くのものが祀られている。家には屋敷神、村には氏神、あるいは道端にも小さな祠や石の仏様が見られ、樹や石にも注連が張られ崇められる。大いなる自然の懐に生きる人間の営みが、〈祀るもの多き〉という側面から見事に捉えられている。へ山国の小さきみ空や鯉幟も同じ地での作であろう。木々の緑に囲まれた空の遠さが描き取られている。

田水張るたちまち山の立ち上がる 高倉 和子

田を植うる準備の半ば入院す 高倉恵美子

猫だけがひまよひまよと田植かな 秋 千晴

田を植ゑて柵田は青き天に入る 長 憲一

一句目、普通は「田水張り」と詠むことが多いだろうが、和子さんはあえて「田水張る」と終止形で一度切つて、その後で張つた田水に映る山を、「たちまち山の立ち上がる」…と畳み掛けるように表現し、句にリズム感とスピード感を与えた。なかなか技巧的だ。

二句目、田植前に入院された恵美子さんは、病院できつちりとそのことを詠みとめられている。もうすぐ退院されるとのこと。ご自愛ください。

私は両親とも生家が農家であったので、田植の時期の忙しさは目にしてきた。今は機械化が進んだとはいえ、やはりこの時期の忙しさは格別であろう。

三句目の猫。周りの状況には一切左右されず、いかにも猫である。「ひまよひまよ」がその気ままな姿を表して絶妙。

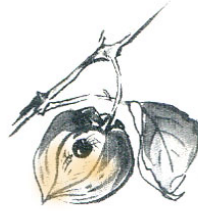
四句目は、田を植え終わつた安堵と、苗という命を得た柵田を見上げた景がダイナミック且つ美しく詠まれている。

大西日玄界灘を黙らす 吉村 摂護

福岡の太陽は玄界灘へ沈む。暑い一日の終りへと玄界灘を赤く染めて太陽は傾く。荒灘はその西日に押さえつけられたように静かなのだ。強引な表現がここでは効果を上げている。気魄がこもつたスケールの大きな作品である。同じ作者のへ胡椒水呑んで闘鶏勢ひ立つの張つた句柄も注目した。胡椒水を呑まされたのでは、嫌でも闘争、心に火がつきそうだ。(以下略)

空集

柴田佐知子選



山国の小さきみ空や鯉織

熊本 松田 明子

初織子の名天下にひるがへり

鯉織息吐ききつて畳まるる

走り根を越え走り根へ蟻の列

暮るるにはまだ間のありて河鹿笛

投げ掛けられしごとく小枝に蛇の衣

名を貰ひ牧へ駆け出す仔馬かな

眠りゐる猫に小判草揺れ止まず

福岡 矢野百合子

一すぢの雲薄れゆく花檮

顔のなき仏ばかりや羽蟻の夜

緑陰に影も畳みて入りにけり

形代の息の強さにのけぞりぬ

みじろぎもせずに眠れる大暑かな

形代や沈みし男浮く女

福岡 亀井 紀子

人形も供へてありぬ木下闇

八十八夜手押しポンプに迎へ水

八尾 田岡千章

泣き声の高し頼もし武具飾る

夏来る指紋に曇る老眼鏡

夏立つや釘と金槌相光る

ことごとく思惑外れ濃紫陽花

梅雨冷や恐童展は関節展

玻璃越しにうどん手打ちや銭葵